

フロイト派精神分析

参考文献

岡野憲一郎『新しい精神分析理論』岩崎学術出版社

アイゼンク『精神分析に別れを告げよう フロイト帝国の衰退と没落』批評社

デーゲン『フロイト先生のウソ』文春文庫

1 フロイト派精神分析の概要

フロイトから始まった精神分析にはさまざまな流派がある。(ユング派、アドラー派 etc. →「深層心理学」と総称)

ここではフロイト派の理論枠組みを主に検討(フロイト派自体も現在では自我心理学、対象関係論をはじめ非常に多くの流儀に分裂)

(1)心の構造

自我／超自我／イド

- ・三つの要素の力学的な関係で神経症が生じる→機械論的説明
- ・心の作用のうち意識に上るのはほんの一部→「無意識」の発見
- ・防衛規制----自我をおびやかすものを抑圧、昇華などさまざまな方法で処理し、自我を守る(特に自我心理学で強調される考え方)

(2)無意識の欲求についての理論

口唇期、肛門期をへて生殖器を対象とする性欲へ

エディプスコンプレックス(男の子の父親に対する嫉妬、おそれ、あこがれなどの複合的感情)

(この部分については現在のフロイト派ではかなり変更がくわえられている)

(3)精神分析治療の理論

- ・自由連想や夢判断による診断
- ・「転移」による治療---欲求の対象を治療者へと一旦転移させることによって欲求から解放

(最近ではむしろ分析者と患者の対等な対話を基礎とするモデルの方が人気とのこと)

2 治療の成功と科学性

この理論に基づく治療で実際に患者が治癒している→一種の仮説演繹法？

自然治癒率の問題

精神療法でなおったとされる患者は実はそんな療法なしでもなおったのでは？

批判側の見積もりでは自然治癒率は3分の2程度、支持側の見積もりでは3分の1程度（精神療法の治癒率が3分の2程度。どの流派の療法でもほとんどかわらない。）

支持側から批判側への批判：「良い研究」と称して取捨選択を行っている

治療効果は個人差が大きいので比較は不可能

きちんとした対照実験は倫理的に問題あり

「ドードー鳥の判定」（全員が勝者）→結局役に立っていないということでは？

3 その他の証拠

- ・この理論であらゆる事例が説明できる→反証主義から見るとむしろ欠点
- ・フロイトの理論は単一の症例の分析から組み立てられたものが多く、きちんとした裏付けがない（エディプスコンプレックスの分析など）要するに、データからの飛躍が大きすぎる
- ・フロイトの代表的な事例には記述に疑問がある。（そもそも神経症でない患者を神経症とみなして治療したことにしてあったり、完治したとされる患者がその後60年にわたって同じ症状を持ち続けていたことがわかったりしている。）
- ・フロイト自身の「夢判断」における分析で幼児期の体験に言及しているものはなく、自分自身の理論を反証する結果になっている。
- ・口唇期といった時期の存在は乳児の行動観察によって否定されている。

4 その他の批判

- ・精神分析は有害な場合もある

→精神分析のカウンセリングによって回復されたとされる「抑圧された記憶」が本当の記憶だという証拠はなににもないにもかかわらず、それによって性的虐待を行ったと告発された両親が有罪とされ、多くの家庭が破壊されてきた。（ロスタフ、ケッチャム『抑圧された記憶の神話』）大事故についての証言などでのさまざまな調査から、細部まで生き生きした「記憶」を暗示で後から植え込むことができることが分かっている。

- ・精神分析に保険を認めることで医療費は削減されるところかかえて増えている。
- ・まだしも行動療法（恐怖症はオペラント条件付けだという前提に基づく治療）の方が効果をあげている（アイゼンクの主張）